

令和7年度第1回みらいミーティング会議報告

- 1 日時 令和7年5月20日（火）15時00分～16時30分
- 2 会場 ライフパーク倉敷 第1会議室
- 3 テーマ 住民主体の支え合いのまちづくり
- 4 参加者 ・地域で活動するボランティア団体・企業 4団体・1企業
（ポレポレハウス、五東福寿クラブ、ぐるっと郷内、玉島信用金庫、呉妹地区社会福祉協議会）
・生活支援コーディネーター 全市担当1人、地区担当3人

発言者	要旨
市長	みらいミーティングは昨年から始まり、様々な分野の市民団体の方々と意見交換をして課題などをうかがい、施策の参考にしている。本日は、お集りの各団体の日頃の取組など活動内容をお聞きし、施策につなげていきたい。
ポレポレハウス	ポレポレハウスを始めたきっかけは、認知症の家族と同居し始めた頃、同じ境遇のラジオ体操仲間と介護座談会を自宅で開催したことによる。その後、地域住民を講師として招く集まりに広がっていき、今では、誰もが参加できる「ポレポレカフェ」や貸出図書を行っている。また、様々な団体に声を掛け、障がい者団体によるパンの販売や保護犬団体のチャリティーイベントも開催している。 このほか、地域にも活動の場を求めて、アダプトプログラムを活用したごみ拾い活動を行い、参加者同士の交流が生まれている。また、多世代が参加する場として、グループホームでの歌のボランティアや出張ブローチづくりを行ったり、毎月ボッチャ教室を開催したりしている。これらの活動を通じて繋がりを深めている。
五東福寿クラブ	五東福寿クラブは設立50年となる老人クラブで、お年寄りを元気に、一人で家に引きこもりにさせないことを目指して活動している。主な活動は、地域の高齢者が朝食に集う「さわやかモーニング」やグラウンドゴルフなどの仲間づくりと、登下校パトロールや子ども食堂「さわやか子どもカレー」などの新たな世代交流。「さわやか子どもカレー」は、小学校の校長先生からの相談がきっかけだった。食べることに困っている子供が身近な地域にいと知り、その子たちがお腹いっぱい食べられる場所であり、居場所になればと思い始めた。今では小中学生だけでなく、小さな子ども家族と来てくれている。最初は20名程度だったが、先週は61名来てくれた。 困難があっても大変だと思わないように努め、とにかくやってみる、声を掛けることを大切にしている。今後も皆と協力して活動を続けたい。
ぐるっと郷内	ぐるっと郷内は、郷内中学校区の高齢者で、介助不要だが通院などに困難がある方を対象に、移動支援ボランティアを行っている。利用登録者33名、月平均13件の利用がある。社会福祉法人からの車両提供と地区社協からの補助金などで運営。運転ボランティアは6名で、アプリで情報を共有している。最大の課題は運転ボランティアの増加が見込めないことだが、困っている人がいればできることを頑張る、という気持ちで活動を継続している。

発言者	要旨
玉島信用金庫	玉島信用金庫は、寄り添い企画として、各支店が地域の課題解決に取り組んでいる。人と人の繋がりを重視し、それによって地域の課題を解決していこうという考えが根本にある。船穂支店では買い物困難者向けに支店の駐車場で月1回のマルシェを開催。出店者・来店者双方の交流を生み、賑わいが創出されている。八王寺支店では、子育て世代の困りごとに対し、お盆期間中の小学生預かり「たましんサマースクール」や子供食堂を実施。このほか、高齢者支援として認知症予防の「はつらつ健康教室」を行い、高校生にもボランティアとして参加してもらっている。地域ごとの課題に対応する企画は多数生まれ、積極的に取り組んでいる。
呉妹地区社会福祉協議会	呉妹地区社会福祉協議会では、高齢化率が40%を超える地域の中で、いつも一人で食事をしている高齢者が子どもと共に食事をする機会を設けている。生活支援コーディネーターの協力のもと、手頃な価格で食事を提供しており、年4回の開催のうち、春休みには花見弁当も用意した。また、国道脇の敷地を借りて花壇管理や体操を行う「畑岡アジサイサロン」を実施。体操する姿が信号待ちの人を笑顔にしているようだ。このほか、グリーンパークまびの畑を活用し、地区社会福祉協議会と緑化協会、学校の連携により、子どもたちを招いた芋ほりイベントも企画。自分のできることで支え合いを広げ、相乗効果を生む活動をモットーとしている。
全市担当生活支援コーディネーター	生活支援コーディネーターは、地域住民がその人らしく住み慣れた地域で生活できるように地域の支え合い活動を支援するため、公的支援などを活用しつつ、人と人、人と支援・活躍の場・意識を結びつける役割を担っている。また、企業、福祉施設、住民団体など多機関が連携することで、地域共生社会の実現に繋がると考えている。 生活支援コーディネーターは、住民との関わりを重視しており、6名体制で活動している。活動内容は、事例集の作成を通じて活動の見える化を行っている。また、居場所・通いの場の創出やサロン活動の活性化を目的にした交流会の開催、いきいきポイント制度の活用による担い手確保などにも取り組んでいる。
市長	地域住民の活発な活動により、様々な繋がりが生み出されていることに深く感謝し、生活支援コーディネーターの尽力にも感謝している。生活支援コーディネーターは、自身の公約である「温もりあふれる健康長寿のまち」の実現に必要であると考え、平成28年度に1名の配置から始め、現在は地域ごとに担当を置いて6名で活動している。参加者のみなさんが活動における工夫や必要な情報、大切にしていることなどを一言ずつお話ししてほしい。また、地区担当の生活支援コーディネーターからもそれぞれの活動に対して一言いただきたい。

発言者	要旨
ポレポレハウス	活動において最も大切にしていることは、参加者と同じ立場で接すること。何かをしてあげるという一方的な姿勢ではなく、共に考え、それぞれの「やりたい」や輝ける場を見つけるお手伝いをしたいと考えている。介護などで疲れている人々に寄り添う活動に加え、てくてくウォークやボッチャなど、誰もが気軽に参加できる活動も行っている。貸出図書を通じて本を介した交流も生まれており、何よりも参加者自身が楽しむことを最優先している。生活支援コーディネーターの協力を得て、自宅でのストレッチヨガなど、大人数の場が苦手な人や男性、一人暮らしの人でも参加しやすい活動も少しずつ広げている。このほか、参加者同士で、「よく頑張っているね」と褒め合い、声を掛けるようにしている。
五東福寿クラブ	地域活動において、参加者への積極的な声掛けを心掛けている。誰一人として孤立させないことを重視。 「さわやか子どもカレー」の立上げには苦労したが、子どもたちが「さわやか子どもカレー」の存在を学校で広めてくれた。参加者には普段呼ばれている名前で名札を付けてもらい、来てくれた人みんなに声掛けをするなど、親しみやすい雰囲気づくりに努めている。また、余ったカレーは一人暮らしのお年寄りに配布し、とても喜ばれている。こうしたコミュニケーションの積み重ねにより、「さわやか子どもカレー」や「さわやかモーニング」などの活動全てが地域全体を盛り上げていくことにつながればと思い、活動が続けている。
地区担当生活支援コーディネーター	「さわやか子どもカレー」は子どもだけでなく、家族ぐるみで楽しめる活動として地域に根付いてきつつある。また、登下校パトロールなどの別の活動で子どもに寄り添い続ける姿は、子ども本人への安心感だけでなく、保護者にとっても心強い支えとなっていると感じる。
ぐるっと郷内	この活動は、山間部に住む方が夫の入院中に病院までの移動手段を確保するのに苦労した話を聞き、何とかしなければという思いから始まった。社会福祉法人や高齢者支援センター、社会福祉協議会との連携により実現し、できる人が、できることを、できる範囲でというスタンスで取り組んでいる。短い時間ではあるが、利用者との会話も運転手ボランティアのやりがいになっている。今後は、交通手段の安定した確保に向けて、郷内地区へのコミュニティタクシー導入に向けた働き掛けも行いたい。
地区担当生活支援コーディネーター	ぐるっと郷内の取り組みは、単に移動を助けるだけでなく、利用者の状況や身体状態を事前に詳細に把握し、支援方法を丁寧に検討している。きめ細やかに配慮し、利用者一人ひとりの生活全体を支えようという姿勢に感銘を受けた。

発言者	要旨
市長	公共交通網の維持が困難になる中で、ボランティアによる移送支援へのニーズが高まっていると認識している。社会福祉法人などが利用者の送迎を行う際に、その空き時間を利用して高齢者などの身近な買い物や通院支援を行った場合などに補助を行う仕組みを検討している。地域の社会福祉法人、地区社会福祉協議会、コミュニティ協議会などが連携してこの仕組みを運用することを目指し、特に要望が多い買い物や病院への移動困難解消に重点を置く。今夏を目途に、このボランティア送迎の仕組みづくりを進めている。
玉島信用金庫	活動の方向性は、お客様や地域の声に耳を傾けることから生まれている。船穂支店のマルシェでは、参加者だけでなく出店事業者同士の連携も生まれ、地域に期待されるイベントとなっている。信用金庫は地域の方のための金融機関なので、人が集まる場所づくりを重視しており、地域住民が集まり交流できる場が提供できてよかったと思っている。 別支店の子どもの預かりや認知症予防教室では、職員や高齢者が小学生や高校生との交流から刺激や喜びを得るなど、多世代交流の場ともなっている。
地区担当生活支援コーディネーター	玉島信用金庫が開催するマルシェについて、信用金庫と地域住民双方にとってメリットがあり、良い関係性が築かれている。企業が地域に貢献したいという思いを持ちつつも難しい側面がある中で、玉島信用金庫の活動は企業の地域貢献の成功例であると感じた。
呉妹地区社会福祉協議会	「畑岡アジサイサロン」の会場となる敷地は以前別の団体がサロン活動を行っていたが、会員の高齢化で解散してしまった。このため、管理が行き届かず荒れ地となってしまった。敷地は呉妹地区の玄関口にあたることから、景観維持の必要性を感じ、近所の花好きな人に声を掛けたところ、30名も集まり、サロン活動を再開した。人集めには興味関心を持つ人が一番だと実感し、やる気のある人を集めることが活動継続の鍵と感じた。高齢化が進む中でも、88歳のメンバーが参加を続けようとする意欲に触れ、年齢に関係なく興味関心があれば参加できると感じている。 世代交代に向けて若手を求めているが、こちらの都合ばかり言うてはいられない。しかし、若手を一人確保できれば、その繋がりから他の若手も参加してくれる効果がある。今後は興味関心のある人、そして高齢者でも無理なく参加できる形で人集めを継続している。
市長	倉敷市では、サロンなどの通いの場が900箇所近くあると聞いているが、通いの場の現状について説明してほしい。
全市担当生活支援コーディネーター	生活支援コーディネーターが把握している通いの場の数は、数年前にはおよそ600箇所だったが、現在は900箇所を超えている。通いの場の存在が地域に周知されたことで、地域の人から新たな通いの場を教えてもらっている。 通いの場の参加者は、男性より女性の方が多く、参加者の半分以上を男性が占める通いの場は珍しい。体操をする通いの場は男性が集まりやすいが、女性と一緒に体操するのは恥ずかしいようで、男性だけの会を立ち上げているところもある。

発言者	要旨
市長	男性は退職後に家にこもりがちになると社会的に言われているが、囲碁や将棋などの趣味を通じて、地域の交流の場に参加することに繋げて欲しい。
全市担当 生活支援 コーディネーター	通いの場は社会参加の入り口になると思うので、地域に出ていくきっかけづくりとして、通いの場の把握や創出を進めていきたい。
ぐるっと 郷内	本日のミーティングに参加するまで、地域活動において企業との連携という発想がなかった。どのようにすれば企業から協力が得られるかについて、具体的な方法を知りたい。
市長	多くの企業が社会貢献に関心を持っている。倉敷市では、全国的な大手の生命保険会社や日本郵政と協力関係を持っている。また、地域に根ざした身近な企業のなかには、地域でお祭りなどを開催している企業もある。そのような企業との連携が重要になってくる。
全市担当 生活支援 コーディネーター	企業との連携について、玉島信用金庫のほかにも連携した企業はいくつかあり、生活支援コーディネーターが作成する事例集に掲載している。今後は、生活支援コーディネーターが中心となって事例集を用いて具体例を示しながら企業に働き掛けたい。また、住民主体の議論の場へ企業の参加を促すことで、地域活動に企業を積極的に巻き込んでいきたいと考える。